

「東アフリカの貧困削減の制度形成（タンザニア、エチオピア、ケニア）  
GRIPS / 開発フォーラム(DF) 2004 年出張報告」

日時：平成 16 年 12 月 15 日(水) 14:00 ~ 16:00

場所：JICA 11 階会議室 EF

参加者：JICA, 外務省、JBIC, FASID, コンサルタント会社、研究機関等から約 25 名

議事：

1. プレゼンテーション (50 分) (各発表内容については配布資料を参照)

(1)PRS (Poverty Reduction Strategy) の進展と方向性 (笹岡) (10 分)

(2)PFM (Public Financial Management) (平尾) (15 分)

(3)教育セクター (山田) (15 分)

(4)地方分権 (笹岡) (10 分)

2. 質疑応答・コメント (50 分)

概要：

本会合では、GRIPS 開発フォーラム発表者より上記それぞれのテーマについて先般の東アフリカ出張報告を行い、報告後に質疑応答が行われた。各発表に対する主要なコメントは以下のとおり（発表者からの応答は省略）。

(全体)

- ・ 低い援助依存度、ドナーの低いレバレッジであるケニアをなぜ調査対象としているのか？ PRS のなかでのインセンティブが働かない国ではないのか？ 本年ケニアが財政支援に関する会議を自国内で開催した意図は、隣国タンザニア、ウガンダにて財政支援を中心として援助が増額したことに焦りを感じたからであって、そのためのデモンストレーション。彼ら自身はそんなに改革や財政支援に本気ではない（ケニアにつき、ドナーと政府の関係は冷え切っていない、ガバナンスの改善につき両方で密接なやり取りもある、とのコメントもあり）。
- ・ 冒頭の説明は聞き逃したが、本研究が学術的研究に発展していくのだとすると、仮説が見えてこない。何をテストしようとしているのか？
- ・ Completion Point 到達国で域内他国のモデルのようにやってほしい国があると思う。これにつき、どのような方向でアプローチを抽出し、まとめるのか？
- ・ 日本の援助戦略に寄与する形で何かユニークなメッセージを伝える方向性に本研究を持って行って欲しい。

(PFM)

- ・ 公共支出拡大期にはデマンド・ドリブンの要因があり、それが予算のハード・シーリ

ングとは別にソフト・シーリングという形で予算配分に影響を与えることがある。その点も考慮すべし。

- ・ エチオピアに関しては、（特に保健分野で）グローバルファンドの存在があり、公共支出をクラウドディングアウトしている可能性がある。

#### (教育)

- ・ 教育の内部効率について分析しているが、資料内のグラフには、教育の質に関するデータしか入っていない。Capitation grants が教科書・教材費に特化しているという認識は違う。
- ・ 教員給与について分析しているが、教員の配置についても言及してほしい。初等・中等・高等レベルのユニットコストの違いも比較してほしい。
- ・ 各国の教育事情の違いに関し、もっと歴史的な背景を踏まえる必要がある。例えばタンザニアの就学率の高さは 1973 年に開始された Universal Primary Education によるものだし、ケニアにはハランベースクールがある。

#### (地方分権)

- ・ エチオピアで能力構築の前に地方政府（ワレダ）に資金が流されて順番が逆であるという NGO の指摘があったが、最初に能力向上ありきではなく、これらは同時にやっていると駄目。
- ・ 地方に資金が流された後にどのように使われたかを見ないと実態がわからない。本研究では問題点が指摘されているのみであり、今後更なる研究のためには、特定の県やセクターで事例研究が必要なのではないか？

以 上